

# 近江楽座 Interview

ACPは現在、文部科学省の教育支援プログラムの1つである「大学院教育改革支援プログラム(大学院GP: Good Practice)」に採択され、活動を行っている。各大学で盛んに行われているGP活動だが、助成期間終了とともに終わってしまうプロジェクトも少なくない。そんな中、GPとしての活動を終えた後も精力的にプロジェクトを継続しているのが、滋賀県立大学の「近江楽座」。その継続の秘訣を、近江楽座でプロジェクトを行う学生の方々に伺った。

photographs : Kaori Noguchi  
interviewer : Iijima

## 近江楽座への関わり方

**A** C P (以下A) 近江楽座に関わり始めたきっかけを教えてください。

**O** 近江楽座(以下O) 私は一年生の時の必修授業で、琵琶湖をとりまく地域に向いてその場で文化を学ぶという実習があったんです。その先生に「近江楽座というものがあから、君らもやったらいいよ」という話があったんです。それで、琵琶湖の対岸の山奥にある高島市朽木という、過疎高齢化が進んでいる山村を実習地を選びました。最初は「はあ？朽木ってどこですか？」みたいな感じで、ネットで調べて申請書を書いて(笑)。地元の人と一緒にプロジェクトをつくることになって企画書を書いたものの、実際には活動をしていく中で得るものが多くなって。現地の子供から年配の方、役所の方とかに出会ううちに、計画通りにいかない活動が増えてきて、そこから授業としてやらされてるというよりは、だんだん自分たちの活動になってきました。オブジェの材料は誰々さんに提供してもらおうとか、ワークショップはこうしようとか、いろんな人と会いながら話して決めていったり。それで、二年やって成果物が出来た。でもこれで終わりってどうなのかって話になった。もって何かやりたいて有志が残って、二年目三年目……五年目。そんな感じで、きっかけは授業でした。私は、ほとんど卒業よりも近江楽座の活動の方に重きを置いてやっています。最初の三年は特に。

**A** 授業がない日に現地に行ったりとか？

**O** ううん、授業があっても二年生の時に取れるだけの授業を取っちゃって、三年からはフリーで動けるようにしました。その朽木というところは、県内なのに往復五時間かかるんですよ。でも、そこまで必死にやれたのは、ただ好きでやっているだけじゃなくて、やらなきゃならないという部分もあって。最初に申請書を書いて、中間報告があり、最終結果報告があり……。成果だけがすべてではないけど、自分たちは何をやってきて、次はどういう方向に進んでいくのか、ということを否応無しに考えさせられるので。場やタイミングを与えてもらっているから続けられる。報告会での発表を着地点にして、次を考えるとどうかというのが大きい。

**A** 学校の授業よりも熱心に取り組むって、なかなかできないことですよ。

**O** 外からはよく珍しいと言われます。楽しいものもあるけど実際はせかされていたり(笑)。年度の最初に申請書を書いて先にゴールを決めちゃうから、それに向けて頑張るっていう部分はあります。

**A** 毎年、継続と新規合わせて20以上のプロジェクトがあるそうですが、どのくらいの学生が参加しているんですか？

**O** 全学生の1割くらいです。各プロジェクトのタイプは全然違うけど、学科を越えて、学部生から院生、先生まで含まれて活動しているところもあって、地域の町づくり委員会と一緒にイベントをしたり、自分たちの研究と共にやっているゼミもあります。やり方も、学校メインだったり、外に出ていたり。タイプが違う分、悩みもバラバラだからさっさと片付くことが少ない。やってる最中は必死で「あーもう今年はおかんわー」ってなったりするけど、終わってから振り返るとやってよかったなって思っ。

**A** それだけの人が参加していたら、引継ぎとかも大変そうですね。発足した時の方針や方法は引き継がれるものなんですか？始めた代の学生たちがいなくなったら、そのプロジェクトの中身も変わっていったり……。

**O** 跡継ぎがない問題も各チームが抱えていて、意志も自動的に継がれるかと思えば、そうでもないし。かと言って、同じ意志を継いでくれる人待たなくて、長いこと継続も難しい。責任者となった学生たちのやりたいことをしているところもあります。

お互いのプロジェクトの成果物を見せ合いながら。



## 地域にどう関わるか

**A** 近江楽座全体では地域活性をテーマにしていますが、地域に入るといことは、ある程度継続性のあるものを長いスパンで考えなければなりませんよ。大変な部分もあると思いますが。

**O** 地域の中で自分たちの立ち位置を探ることに困ったりします。自分たちは地域の人から学びたいし、何か役に立ちたいって思う。かと言って、地域の人に利用されるだけじゃ駄目だとも思うし。学生はその住人じゃないから、地元の人になりきれないけど、地域のことを考えれば考えるほど地元の人に寄っていつかやっつっていつか色々考えさせられます。いくら地元の人に、「過疎高齢化大変ですよ」といって思いを寄せたからといって何も変わらなかつたりするから。

**A** 過疎高齢化って私たちは未経験じゃないですか。それに同調しても、「あなた経験してないじゃない」って、もちろん思われるんだけど。何も知らないし同情しかできないからって、口をつぐむのではなく、別のアプローチの仕方が必要なんですね。

**O** それしかできないかも、と思います。私たちは一年先とか二年先までしか考えられなかつたりするけど、地元に住む人は10年20年30年、孫の代まで、という考え方だから。それじゃ私たちがやっている意味って無いかもしれないけど、そこで邪魔になるから止めようとは思えなくて。割きりというか、何かできないかかと思つた時に、自分たちができることをやるしかない。地域活性化とか町づくりとかって、嫌というほど聞くじゃないですか。それだけ聞いていたら、イベントやって成功すればいいとか、集客数が見込めればいいとか。実際行ってみて、答えはそんな簡単じゃないってことを学びました。

例えば、他の大学のレポートとか報告書とか見ていると活性化をすごく謳っていたり(笑)、環境問題という大きなテーマをやっていたりもするけれど、結局は大学の一つのプロジェクトで周りに広められはしないから、簡単なことではなくて……。県大(滋賀県立大学)の学生はそれについて自分で気づけているなと思います。その後押しは近江楽座がしてくれているような気がする。数字で見える成果を出せとか言われたこともないし、目に見える進展がなきゃ活動じゃないっていつつ

な雰囲気はなくて。学生力を高める場、という学生が成長することを応援する大前提があるから、悩んでいるところも認めてくれて、答えが出てないことでも見守ってくれてる寛容さがあるんだと思います。

## 今だから聞きたいこと

**A** 何年も近江楽座に関わってきてどうでしたか？今までの活動の中で反省点や、それを踏まえての今後の課題はありますか？

**O** 私は、1、2年生では全然関わっていません。二年生でいきなり二つのプロジェクトに関わったんだけど、今思い返すと悔やまれます(笑)。参加したのは自分の意志でもなし、強制というわけでもなくて。ただ、周りの雰囲気として、資金面でのサポートもあるし、活用していった方がいい、という感じがありました。先輩から活動を引き継ぐ際にも「何か難しい報告書とか書かないといけないけど、お金も貰えるからやった方がいい」と言われただけ。助成金なら他にもあったし、その時点で活動を続けていくだけの資金もありました。特にやりたいことがあるわけでもないんだから、そこで継続は止めるっていう選択肢もあったのに。結局一年間お金の使道も無いまま過ぎてしまっただけで、最後は無理失理使った、という感じでした。

学生主体で活動していく場合、近江楽座の存在する意味に気づけないうち、お金を貰う助成金システムみたいになつてしまつ。そのことを、引き継いでいく先輩も引き継がれる後輩も、しっかりと把握できているのがベストだとは思いますが、実際に今それを認識できている学生はほとんどいないと思います。入ってからスキルアップ等の面ではサポート体制が整ってきてるけど、近江楽座の活用術と、いづか楽座自体の必要性を学生に気づかせる方法を考えなきゃいけないのかもしれないですね。なかなか教えづらいところもあるだろうけれど。

お話を聞かせて頂いた滋賀県立大学の野口香織さん、山形達也さん、御子菜奈子さん、ありがとうございました。



「近江楽座のススメ」  
学生力で地域が変わる/4年間の軌跡  
(2008, ラトルス)

スチューデントファーム「近江楽座」(滋賀県立大学/滋賀県彦根市)  
文部科学省の平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に採択され、「学生主体による地域活性化活動」をテーマ開始された取り組み。地域に根ざした教育を行っている大学の特色を活かし、ものづくり、食、農、デザインなど、多様な分野からのアプローチを行う。GPとして3年間活動し、助成期間が終了した平成19年度からは、大学独自の予算を用いて活動している。

